

山口弥一郎の東北研究再考

地域社会の動的把握とフィールド学の実践

Reconsidering Yaichiro Yamaguchi's Tohoku Study :
Understanding the Dynamics of Local Communities
and Practicing Field Studies

内山大介

UCHIYAMA Daisuke

はじめに

- ① 山口弥一郎の生涯と学問
- ② 地域課題としての自然災害
- ③ 農村の生活記録から青年教育の推進へ
- ④ 戦前・戦後の学校教育と民俗学実践
- ⑤ 地域学会の牽引と地域ネットワークの形成
- ⑥ 地域の視点からみた山口弥一郎の東北研究

おわりに

【論文要旨】

山口弥一郎は明治35年に福島県田新鶴村に生まれ、生涯にわたって東北各地をフィールドに調査研究を行った。その山口が近年注目を浴びるようになったきっかけは、平成23年の東日本大震災であった。山口は昭和8年の三陸津波後から三陸を歩き始め、被災地の暮らしや復興のあり方を調べた。その仕事は東日本大震災後に大きく評価され、著書『津浪と村』が復刊されて大きな反響を呼んだ。そのため山口は津波被災地の研究者としてのイメージが浸透しているが、実際には東北をフィールドに生涯を通じて多様な課題に取り組み、独自の成果を挙げている。

例えば昭和戦中から戦後にかけての時期は、農村に暮らしながら生活を記録するという参与観察的な調査実践を進め、それは農村の生活改善のための青年教育へと展開した。また長く学校教員として暮らした山口は、学校の授業や課外活動を通じて、若い教え子たちの地域文化への理解や課題を発見する力を養う取り組みを実践した。さらに同僚や後輩たちとともに地域学会を組織し、研究活動やフィールドワークを通じて多様な地域ネットワークの形成にも寄与している。こうした取り組みのなかで山口が常に重視していたのは、フィールドワークである。なかでも自然災害や戦争、過疎、地域開発などといった暮らしの場の危機的な状況に目を向け、地域に横たわるそうした生活課題を多様な学問的アプローチから解こうとした。

本論では山口が生涯にわたって取り組んだ主な仕事をテーマごとに取り上げ、その変遷を追うことでフィールド学としての山口の実践の再評価を行う。それは単に学史研究への新たなデータの提供だけを意味しない。災害が多発する今日において、フィールドワークを基礎とした人文学的な研究のあり方を問い直すための作業でもある。

【キーワード】 山口弥一郎、東北、フィールドワーク、実践、学校教育